「17年目の秘密」

第5話「人を想う心」

第一稿

作・壽倉　雅

登場人物

谷島春樹（17）　中央高校全日制二年生
夏希（20）　姉、キャバ嬢

竹中倫子（17）　無職

山岸利枝子（17）　中央高校全日制二年生
あやめ（15）　妹、中学三年生

宮田真由子（17）　未婚の母
哲男（48）　父、医者
真実（0）　娘、赤ん坊

藤原亮（17）　中央高校全日制二年生

川村浩輔（17）　中央高校定時制二年生
靖司（52）　父、会社員
愛子（49）　母、専業主婦
謙輔（25）　兄、会社員

牧和哉（17）　滝雀学園高校二年生
淑子（45）　母、不動産会社副社長

永井聡実（17）　滝雀学園高校二年生
滋郎（50）　父、会社員
冨美代（50）　継母、専業主婦

同級生亜沙美（17）　中央高校全日制二年生

飯塚純平（25）　真由子の元彼、会社員

1　アパート・谷島家・居間

倫子が鼻歌を歌いながら、昼食を作っている。

と、ソファーで横になっていた春樹が目を覚ます。

春樹「あれ、もう昼？」

倫子「（振り返って）あ、起きた。起こすのも悪いと思ったから、ほっといたんだけど」

春樹「（あくびをしながら）夏休みも何回か学校に行って、学校祭の準備しなきゃと思ってたんだけど」

倫子「せっかく夏休みに入ったんだから、ゆっくりすれば良いのに」

春樹「そうゆっくりもしてられないの」

倫子「一日ぐらい休んでも良いでしょ。せっかくの連休なんだから、充電期間にしなよ」

春樹「（苦笑して）まあ、一日ぐらい良いか」

2　道

学校帰りの和哉と聡実が歩いている。

和哉「そっか……。最近、紗耶香と全然話してないと思ったら、そんなことになってのか……」
聡実「うん……。いくら知らなかったとは言え、紗耶香には悲しい思いさせちゃった……」
和哉「こうして見ると、やっぱり人間関係って複雑なんだな……」
聡実「……」
和哉「確かに、紗耶香には自分のことが精いっぱいだからって断ったけど、確かにあの時、もう俺は聡実のことを考えてたんだよな……」
聡実「和哉君……」
和哉「何も、男は俺一人じゃないんだ。紗耶香だって、いつかは新しい彼氏でも作るだろ。そしたら、俺と聡実とのことなんて、忘れるだろ」
聡実「でももしかしたら、この傷はもう修復されないのかもしれない……。私、和哉君

と付き合ったこと、間違いだったのかな…
…」

和哉、真剣な顔をして立ち止まる。

和哉「聡実」

聡実「……？」

和哉、聡実の傍までやってくると、突然キスをする。

聡実「！」

聡実、ハッと我に返ると、和哉を突き飛ばす。

聡実「（過呼吸になって）……」

和哉「……」

聡実「……ごめん」

と、走り去っていく。

呆然と見送る和哉。

3　山岸家・利枝子の部屋

利枝子が、ベッドに横になって退屈そうに漫画を読んでいる。

と、携帯電話を取り出して、電話をか

ける。

利枝子「（電話に）もしもし、真由子。ねえ、遊びに行っても良い？　え、お父さん二週間前からアメリカに出張……それで、いつ帰ってくるの？　来週か……。じゃあ、その間真由子一人なんだ。真実ちゃんの子育てもあるだろうし、手伝いに行こうか？　え、うちは大丈夫。うちもね、母さんが友達と海外旅行に行ってるから留守なの。あやめ？　まあ、誰かに預かってもらうよ。そんなにかからないと思うし。じゃあ、またあとで」

と、電話を切ると、出かける支度をする。

4　同・あやめの部屋

あやめが勉強をしている。

と、出かける支度をした利枝子が入ってくる。

利枝子「あやめ、すぐに出かける支度して」

あやめ「どうしたの、急に？」
利枝子「いいから早く」
渋々支度を始めるあやめ。

5　アパート・谷島家・居間

聡実が来ており、春樹と倫子と深刻そうに話している。

倫子「それで突き飛ばしちゃったの？」
聡実「うん……。まさか突然キスされるなんて思わなかったし、なんせ……初めてだったから」
倫子「ファーストキスだったんだ」
聡実「だって、人を好きになったのが初めてなんだもん、当たり前じゃん」
倫子「だからって、突き飛ばさなくても……」
聡実「びっくりしたんだもん。多分、私嫌われたのかもしれない」
春樹「（呆れるように）バカバカしい……」
聡実「え？」
春樹「和哉が、そんなことで聡実を嫌いにな

るわけないでしょ」

聡実「どうしてそんなことが言えるの？」

春樹「男の勘と、長年の信頼関係」

聡実「何それ？」

春樹「俺には分かる。俺と和哉は、小学校の頃からの付き合いだよ。和哉がどんな男か、分かってるつもり。自分からキスをして、それで突き飛ばされたぐらいで、女を嫌いになるような男じゃない。むしろ、和哉は相手を大事に思ってる子だから、自分がかえって嫌われたんじゃないかって思ってるかもよ」

聡実「……」

倫子「夏休みに入ったんだから、どっかゆっくりデートとかすれば良いんだよ。そうすれば、グッと距離、縮むと思うよ」

不安な顔の聡実。

6　牧家・和哉の部屋

和哉が黙々と勉強をしている。

と、ふと手を止める。

×　×　×

〈フラッシュ〉

聡実に突き飛ばされる和哉。

聡実「（過呼吸になって）……」

和哉「……」

聡実「……ごめん」

×　×　×

和哉「（呟くように）嫌われたかな……」

7　永井家・聡実の部屋

携帯電話を開いている聡実――和哉に電話をかける。

聡実「（電話に）あ、和哉君。ごめんね、急に電話しちゃって……。あのさ、明後日、空いてる？　ちょっと、一緒に出掛けようかなと思ったんだけど。いや、都合が悪いんだったら良いの……。え、プール？　（と笑顔になって）うん、行きたいッ。うん、じゃあ明後日ね。楽しみにしてる。うん、

おやすみ」

と、嬉しそうに電話を切る。

8　アパート・谷島家・玄関

インターホンが鳴り、倫子が来る。

倫子「はい？　どちら様ですか」

と、利枝子の声が聞こえる。

利枝子の声「倫子？　私、利枝子」

倫子「利枝子……？」

と、ドアを開ける。

利枝子が、あやめを連れて立っている。

倫子「どうしたの？」

利枝子「お願いがあるんだけど、あやめ預かってくれない？」

倫子「え、ちょっと待ってね。（と居間に向かって）春樹、ちょっと来て」

と、春樹がやって来る。

春樹「あれ、利枝子どうしたの？」

倫子「（春樹に）あやめちゃんを預かってほしいんだって」

春樹「え？」
利枝子「友達と近場まで旅行することが決まっちゃったの。四日後には迎えに来るから。それまでよろしく。じゃあね」
と、そそくさと去っていく。
春樹「ちょっと、利枝子ッ」
唖然顔の春樹である。

タイトル
『第５話　人を想う心』

9　宮田家・居間
眠っている真実の寝顔を見ている利枝子と真由子。
利枝子「ごめんね、急に」
真由子「大丈夫。むしろ、来てくれてありがとう」
利枝子「一人じゃ大変でしょ」
真由子「まあね……」
利枝子「あれから、元彼から連絡あった？」

真由子「まあ……何回か……」
利枝子「未練がましい男だね。自分から捨てたくせに」
真由子「利枝子のほうこそ、私のところに来たいって何かあったの？」
利枝子「……」
真由子「あやめちゃんとのこと？」
利枝子「まあ……そんなとこ。一緒にいたくないんだよね」
真由子「どうして？　たった一人の可愛い妹じゃん。私ひとりっ子だから、羨ましいんだよ」
利枝子「……」
真由子「あやめちゃん、春樹のところに預けてきたって言ったけど、春樹には何て言ったの？」
利枝子「友達と近場まで旅行することになったからって言ってある」
真由子「大丈夫？　そんなこと言って」
利枝子「嘘も方便だよ」

不安な顔の真由子。

10　アパート・谷島家・居間

春樹と倫子が布団を敷いている。

風呂上りのあやめが入ってくる。

春樹「あやめちゃん。せっかく来てもらったのに、こんなところでごめんね。一応、ここには一つ部屋があるんだけど、物置みたいになって足場がないから、普段はここで眠ってるの。我慢してね」

あやめ「全然大丈夫です。私、普段はベッドだから、床に布団敷いて寝てみたいと思ってたんです」

春樹「そっか。じゃあ、その分ここであやめちゃんの希望を叶えてください（と笑う）」

倫子「春樹。次、良いよ風呂入って。私、最後で良いから」

春樹「そう。じゃ、入ってくるわ」

と、出ていこうとする。

倫子「春樹（と呼び止める）」

春樹「何？」

倫子「（小声で）春樹。私この間、夏希ちゃんに電話したの」

春樹「……」

倫子「私がここに来てから、全然夏希ちゃんの顔見ないから、何かあったのかと思って電話したら、全部話してくれた」

春樹「……」

倫子「驚いた。あんなに仲の良かった夏希ちゃんと春樹が、こんなことになってたこと」

春樹「……」

倫子「たった一人の肉親なんだから、大事にしてあげてよ」

と、ゆっくり出ていく。

春樹「……」

11　市民プール

水着姿の和哉と聡実が、屋外のジャグジーに入っている。

和哉「やっぱり、夏はプールだな」

聡実「久しぶりに泳いだよ。あんなに泳いだのは、小学生以来かも（と笑う）」
和哉「聡実……ごめんな」
聡実「ううん。私のほうこそ……。変なこと言ったばっかりに、何だか変なことになっちゃって……」
和哉「悪かったな……」
聡実「……」
和哉「なあ、明日って、花火大会だったよな」
聡実「あ、そういえばそうだね」
和哉「一緒に行くか？」
聡実「もちろん。浴衣で行くね」
和哉「じゃあ、俺も浴衣で行こうかな（と笑う）」
微笑む聡実――少し遠くを見て、
聡実「あれ？」
和哉「どうした？」
聡実「ほら、あそこ」
フェンス越しの道を、利枝子と真実を抱えた真由子が、買い物袋を掲げて歩

いているのが見える。

和哉「真実ちゃんと一緒に買い物か。ちゃんと母親やってるんだね、真由子も」

聡実「それに、利枝子が手伝ってくれたら、心強いよね」

和哉「よし、泳ぐか」

聡実「うん」

と、ジャグジーを出ると、手をつないで、別のプールへ行く。

12　アパート・谷島家・居間

食事の支度をしている春樹とあやめ――倫子が電話で話している。

倫子「うん、分かった。じゃあ、明日の夕方に行くね。はーい、じゃあね。（と電話を切ると春樹に）聡実、今日和哉とプールに行ったんだって」

春樹「へえ、夏満喫してるじゃん」

倫子「それで、明日花火大会があるでしょ。聡実、和哉と一緒に行くみたいなんだけど、

浴衣の着付けしてほしいって頼まれた」
春樹「倫子、できるの？」
倫子「失礼だね、それぐらいできるよ。だから、明日夕方、少し出かけてくるから」
あやめ「そういえば、明日花火大会なんですね。すっかり忘れてました」
春樹「俺も。あ、そうだ。明日、ここでみんなで見ようか。公園とか神社は、多分出店で騒がしいでしょ。ここからでも十分見られるんだよ、去年も見れたから」
あやめ「楽しみだなぁ」
微笑んでいる春樹。

13　永井家・聡実の部屋（翌）
倫子が聡実の着付けを手伝っている。
聡実「ごめん、急に頼んじゃって」
倫子「良いよ。私はね、和哉と聡実のことを応援してるの。協力したいから」
聡実「ありがとう」
と、メイク道具を出して、聡実の顔に

メイクをする倫子。

聡実「私、メイクなんて全然したことないから。昨日も、すっぴんだったし」

倫子「プール楽しかった？」

聡実「うん、とっても満喫できた」

倫子「そっか」

聡実「あ、そういえば昨日プール行ったとき、フェンス越しだったけど、利枝子と真由子見かけたよ」

倫子「え……？」

聡実「真実ちゃんと三人で買い物でもしたんだろうね。みんな、夏休み満喫してるんだなあって思った」

倫子「そう……」

怪訝な顔の倫子である。

14　公園（夕方）

出店が並んでおり、その間を浴衣姿の和哉と聡実が、手をつないで歩いている。

聡実「似合うね、浴衣」
和哉「聡実だって、似合ってるよ」
聡実「当たり前だよ。これ選んでくれたの、お母さんだもん」
和哉「ファッション雑誌の仕事やってるだけあって、センスが良いんだな」
聡実「仕事に生きてきたんだもん、私のお母さん。離婚してから、全然会ってないけど、会えるんだったら会いたいよ」
和哉「……」
聡実「あ、ごめん」
和哉「良いよ。（と出店を見て）あ、そこに金魚すくいあるぞ。やるか」
聡実「うん」

15　アパート・谷島家・居間（夜）

夕飯の支度をしている春樹、倫子、あやめ。
倫子「そろそろ、花火始まる頃じゃないかな？」

春樹「あ、もうそんな時間か？」
あやめ「早く見ましょうよ！」

16　宮田家・ベランダ

利枝子と、真実を抱えた真由子が夜空を見上げている。

利枝子「もう上がるね」
真由子「そうだね。（と真実に）真実、今から綺麗な花火見せてあげるからね」

笑顔を見せる真実。

嬉しそうに真実の顔を眺めている利枝子。

17　夜空に花火が上がる

18　アパート・谷島家・居間

ハンバーグを食べている春樹、倫子、あやめ。

窓から花火が打ちあがるのが見える。

春樹「綺麗だね」

倫子「ここからも意外と見れるんだ」
春樹「良いでしょ。ここなら、誰に気を使うことなくゆっくり見れるんだから」
あやめ「花火って、こんなに綺麗なんですね。いつもこのときは、お母さんの手伝いばっかで、呑気に花火大会に行く暇もなかったし、花火を見る余裕もありませんでしたから」
倫子「でも、今年は違うから良かったじゃない。利枝子と一緒に見られないのは残念かもしれないけど、ある意味このメンバーで花火見るのはレアだよ」
春樹「このハンバーグの焼き加減は？」
倫子「レアって言いたいんでしょ？」
春樹「そう」
倫子「しょうもないんだから」
春樹「そんな風に言わなくても良いのに。（とあやめに）ねえ」
あやめ「春樹先輩と倫子先輩って面白いですね、何だか夫婦みたい」

春樹「そりゃ、一緒の養護施設で育った仲だからね」
倫子「そう。血がつながっていなくても、私と春樹は家族みたいなもの……いや、家族なんだよ」
春樹「あやめちゃんには、まだ難しいかもしれないけど、もう少し大きくなったら、分かるようになるよ。俺たちの気持ち」
あやめ「血がつながっていなくても、家族になれるってことがですか」
春樹「そう」
不思議そうな顔のあやめ。

19　牧家・居間

縁側に座っている和哉と聡実――空を見上げて花火を見ている。
和哉「二人で花火見るって、良いもんだな」
聡実「うん。なんか、これが幸せっていう気がする」
和哉「え……？」

聡実「好きな人と、夜の出店回って、一緒に花火を見ることが、夏の幸せなんだなって気がする」

和哉「そうだな」

聡実「ねえ、和哉君」

和哉「どうした？」

聡実「今なら、私、何に対しても覚悟できてる」

和哉、聡実に振り向く。

じっとお互いを見つめあう和哉と聡実。

和哉、ゆっくりと聡実に顔を近づけていく――聡実、目を閉じる。

二人の唇がふれる。

和哉「……」

聡実「……」

和哉「なあ」

聡実「……？」

和哉「部屋、行こうか」

聡実「うん……」

20　何発も花火が打ち上げられていく

21　牧家・和哉の部屋

優しく抱き合う和哉と聡実。

和哉「良いのか、本当に？」

聡実「うん……。もう、心の準備はできてるから……」

和哉、聡実の浴衣の帯をほどいていく。

聡実「……」

浴衣を脱がす和哉――浴衣が、ゆっくりと床に落ちる。

×　×　×

ベッドの中で、手を握り合い、体を重ねている和哉と聡実。

グッと目をつぶっている聡実。

強く手を絡ませていく和哉と聡実。

22　同場所（時間経過）

ベッドの中で、和哉に寄り添うようにくっついている聡実。

和哉「ごめんな」
聡実「謝らないでよ。感謝してるんだから」
和哉「え……？」
聡実「ありがとう……」
和哉「聡実……」
と、聡実を強く抱きしめる――幸せそうな顔をしている聡実。

23　アパート・谷島家・居間
あやめが既に寝ている。
春樹と倫子が小声で話している。
春樹「聡実、和哉のところで泊まったのかな？」
倫子「連絡がないってことは、そういうことでしょ」
春樹「聡実もとうとう、男の子の家に泊まることになったか」
倫子「あの二人は付き合ってるんだもん、どちらかの家にお泊りすることぐらいあるでしょ」

春樹「前にネットのニュースで見たけど、お互いに恋愛関係になっていれば、性交渉はできるっていう回答が、十代では５０パーセント近くあったんだって」

倫子「じゃあ、和哉と聡実も、あり得るってこと？」

春樹「（苦笑して）ダメだね。新聞部にいると、どうも変な詮索ばっかりしちゃって」

倫子「そんなことないって」

春樹「性交渉に伴うリスクがあることが分かってても、行動に移してしまうのが人間の心理ってものだよね。真由子だってそうだったわけだし」

倫子「あ、それで思い出したんだけど、今日、聡実の浴衣の着付けに行ったとき、変なこと言ってたの」

春樹「変なこと？」

倫子「うん。昨日プールに出かけたとき、利枝子と真実ちゃんを抱えた真由子が、歩いてるのを見たんだって」

春樹「え、ちょっと待ってよ。利枝子って、友達と旅行中で、それだから俺たちにあやめちゃんを預けたんじゃないの？」

倫子「私もおかしいとは思ってるの。もし、聡実が見たのが、本当に利枝子たちだったら、利枝子は、私たちに嘘をついたことになるよね」

春樹「そんな、利枝子が……」

ゆっくりと目を開けるあやめ――会話を聞いていたようで、寂しい顔をしている。

そんなあやめに気づかず、難しい顔をしている春樹と倫子。

24　牧家・和哉の部屋（翌朝）

ベッドで聡実が眠っている――ゆっくりと目を開けて、体を起こす。裸のまま眠っていたことに気が付いて、ハッとなる。

隣で眠っていた和哉が目を覚ます。

和哉「起きた？」
聡実「うん」
和哉「……？　どうした？」
聡実「服、貸してくれる？」
和哉「そっか……。浴衣で来たんだもんな」
聡実「うん……」
和哉「俺のジャージ貸すよ」
聡実「ありがとう」

25　永井家・玄関

聡実が帰宅する。

26　同・居間

聡実、入る。

ソファーに座っていた父・滋郎（50）と継母・冨美代（50）が、待っている。

滋郎、突然聡実の前まで来ると、聡実の頬を叩く。

冨美代「あなた……」

聡実「（滋郎に）何するのッ」

滋郎「父さんがどれだけ心配したか分かってるのか」
聡実「友達の家に泊まっただけでしょ。そんな大袈裟にならなくたって」
冨美代「お父さんはね、聡実ちゃんのことが心配で、寝ずにずっと待ってたのよ」
聡実「そうやって、私を心配しているふりして、私に気を許させようとしてるかもしれないけど、その手には乗らないからね。私の母親は一人だし、この人を母親だなんて思わないし、こんな女と再婚した人も父親だなんて思わない」
滋郎「何だとッ」
聡実「私のことはほっといて。着替えたら、出かけるから」
滋郎「また出かけるのか？」
聡実「友達のところに行ってくる。こう言えば良いんでしょ」
と、階段をのぼっていく。
冨美代「聡実ちゃん」

と、後を追おうとする。

滋郎「ほっとけッ」

冨美代「……」

難しい顔をして、二階の様子を伺おうとしている冨美代。

27　アパート・谷島家・居間

聡実が来ており、春樹、倫子、あやめと話している。

倫子「それで、結局和哉のところに泊まったんだ」

聡実「うん。春樹の言う通り、和哉君のことを心の底から信じることができた。だから一緒に朝を迎えることができたし、朝帰りをしたことは、悪いことだって思ってない」

春樹「お父さんたち、心配してるんじゃないかな……」

あやめ「（恐る恐る）あの……」

倫子「どうしたの？」

あやめ「（聡実に）本当なんですか？　姉と、

真由子先輩を見たっていうのは」
春樹「（ハッとして）あやめちゃんッ……」
あやめ「ごめんなさい。盗み聞きするつもりはなかったんですけど、聞こえちゃったんです。昨夜の会話……」
春樹「……」
倫子「……」
聡実「（あやめに）本当に利枝子たちかどうか分からないんだよ。少し遠くから見ただけだから、もしかしたら人間違いかもしれないし」
黙っているあやめ。
聡実、あやめの様子を伺いながら、
聡実「見間違えだよ、多分……」
と、インターホンが鳴る。
出ていく春樹。

28　同・同・玄関

春樹、来ると、ドアを開ける。
利枝子が立っている。

利枝子「あやめ、迎えに来た。ごめんね、いろいろ迷惑かけちゃって」
春樹「ちょうど良かった」
利枝子「……？」
春樹「利枝子に話があるの」
利枝子「私に？」
春樹「うん」
不思議そうに春樹を見つめる利枝子。
難しい顔の春樹。

29　同・同・居間

春樹と利枝子が深刻そうに話している
――側で聞いている倫子、聡実、あやめ。
春樹「聡実が見たのは、本当だったんだ」
利枝子「そうだよ。確かに、真由子と真実ちゃんと出かけたよ」
春樹「どうして、わざわざ旅行なんて嘘ついたの。真由子のところに行くんだったら、そうやって初めから言えば良いじゃん。そ

りゃ、真由子は利枝子が手伝いに来てくれて良かったかもしれないよ。けどさ、利枝子が俺たちにあやめちゃんを押し付けたことは、何か腑に落ちないと言うか……」

利枝子「……」

春樹「あやめちゃんを預かって、一緒に花火も見れたし、楽しかった。けど、それじゃあ筋が通らないような気がして」

あやめ「春樹先輩、良いんですよ。姉は、私が邪魔だと思ったから、ここに預けたんですから」

春樹「あやめちゃんは、自分が利枝子にとって邪魔な存在だと思ってるの？　だとしたら、そんな気持ち捨てな」

利枝子「（突然怒鳴って）私、確かにあやめを預けたけど、可愛がってくれって言った覚えはないからねッ。私に、妹なんていらないんだから」

聡実「利枝子、何もそんな冷たい言い方……」

春樹「少しはあやめちゃんの気持ちも考えな

よ。たった一人の妹でしょ」
利枝子「母親の違うこんな女なんて、妹じゃない」
倫子「！」
聡実「！」
あやめ「！」
春樹、利枝子の頬をたたく。
睨み合う春樹と利枝子。
春樹「いくら嫌いだからって、それは言い過ぎでしょ……」
利枝子「本当だよ。嘘だと思うなら、戸籍でも何でも調べたら良いでしょ」
春樹「……」
利枝子「あやめの本当の母親はね、私の父親を連れて、駆け落ちした相手なんだよ。父親が交通事故で亡くなった後、自分ひとりじゃ面倒見られないって、いつの間にか作ってた子どもを、私の母親に押し付けて、姿消したんだよ」
あやめ「その子どもが、私……」

利枝子「そうだよ。あんたの母親はね、私の家族を滅茶苦茶にした、悪魔みたいな女なんだよ。そんな女の血が入っているあんたに、どんな愛情注げっていうの。そんなの、こっちから願い下げだよ」

と、飛び出していく。

春樹「利枝子ッ」

倫子「（冷静に）良い、私が行くから」

と、慌てて後を追っていく。

呆然としているあやめ。

聡実「（あやめに）ごめんね、私が倫子に余計なこと言っちゃったばっかりに……」

春樹「聡実が謝ることないんだよ……」

あやめ「やっぱり……変だと思ったんです。私、母親にも姉にも似ているところが全くなくて、なんだか一人他人が混じりこんでいるような気がしてたんです。でも、これでやっとその理由が分かりました」

と、作り笑顔を見せる。

険しい顔をしている春樹。

聡実も、あやめの様子を見ながらも悲しい顔をしている。

30　中央高校・新聞部室

春樹と亜沙美が、ポスターを作っている。

春樹「もう少ししたら、休憩しよっか」

亜沙美「そうだね」

と、ノック音がし、ドアが開く――亮が入ってくる。

亮「おお、お疲れ」

春樹「（手を止めて）何だ、今日来てたんだ」

亮「あれだけテスト勉強頑張ったのに、赤点取っちゃったんだよ」

亜沙美「ありゃりゃ、それはお気の毒様」

春樹「（春樹に）なあ、聞いたぞ。利枝子と喧嘩したんだって」

春樹「……」

亜沙美「（亮に）そうなの？」

亮「ああ。大分揉め事になったらしいな」

春樹「俺、利枝子と絶交する覚悟はできてるから」
亜沙美「何があったの、利枝子と？　ずっと仲が良かった二人からは考えられないけど」
春樹「長年一緒にいるとね、嫌なところが見えてきちゃうものなんだよ」
亮「何が原因なんだ？」
春樹「聞きたかったら利枝子にでも聞いてみたら？　喧嘩の原因を作った本人に聞いてみて」
と、再びポスターを作り始める。
お互いの顔を見合う亮と亜沙美。

31　宮田家・表～玄関
足音がして、誰かがやって来る――真由子の元彼・飯塚純平（25）である。
純平「（表札を見て）ここか」
と、玄関へ入っていく――インターホンを鳴らす。

中から、足音が聞こえてきて、だんだんと大きくなっていく――ドアが開き、真由子が出てくる。

真由子「はーい。（と純平に気づくと唖然として）純平……」

純平「久しぶり」

真由子「何しに来たの。帰ってよ」

純平「一度会って話したかったんだよ」

真由子「今頃、何を話せって言うの」

純平「気にしてたんだよ。俺と別れてから、どうしてるのかと思って……」

真由子「よく言うよ。私に子どもができたことが分かったら、いきなり別れ告げてきたのは、そっちのほうでしょ。認知しなかったから、私は一人で真実を育てることになって、不安もあったし、反対もされたけど、おかげで今は幸せなの。私の幸せ、壊さないで」

純平「……」

と、居間から真実の泣き声が聞こえる。

中の様子を伺おうとする純平。

真由子「とにかく帰って。もう、あんたと話すことは何もないから」

と、勢いよくドアを閉める。

取り残されように立ち尽くしている純平。

32　同・居間

真由子が、疲れた顔をして入ってくる――気を取り直して、真実に笑顔を見せると、抱えてあやし始める。

真由子「よしよし、ごめんね。大きな声出して」

泣き続けている真実。

33　道

純平が歩いている――携帯電話が鳴り、出る。

純平「もしもし。ああ、今日？　悪い、取引先の人と会合なんだよ……。ごめんな、次

の休みは、ちゃんとどこか連れてくよ。今日は、早めに帰るつもり。うん、じゃあ」

と、携帯電話を切ると、溜息をつく。

34　宮田家・居間

春樹と倫子が来ており、眠っている真実を起こさないよう、小声で真由子と話している。

真由子「利枝子とのこと、ごめんね。春樹たちにも迷惑かけて……」

春樹「何も真由子が謝ることないんだよ。悪いのは全部利枝子なんだから」

真由子「けど、まさかあやめちゃんが利枝子と異母姉妹だったなんてね……」

春樹「そりゃあ、利枝子の気持ちだって、分からなくもない……。けど、あやめちゃんのこと考えるとさ……」

真由子「……」

倫子「（冷静に春樹に）ここで利枝子の話はやめよ。春樹だって、嫌なことを忘れるた

めに、真実ちゃんの顔見に来たんだから」
春樹「そうだった。幸せな生活送ってる真由子や真実ちゃんを見て、元気貰わないとね」
真由子、春樹たちに笑顔を見せるが、ふと難しい顔になる。

35　アパート・谷島家・居間（夜）
夕飯を食べている春樹と倫子。
春樹「利枝子とあやめちゃん、今頃どうしてるかな……。もうお母さんは帰ってきてるとは思うけど、お互い気まずいよね」
倫子「心配なの？」
春樹「（ムッとして）あやめちゃんのことがね……」
倫子「お母さんがついてるから大丈夫でしょ」
春樹「あやめちゃんから見れば、血の繋がりのない母親だよ。しかも、あやめちゃんの本当の母親は、利枝子の父親を奪った女。母親からすれば、一番憎い女の血が入ってるあやめちゃんだよ。そんな事実知ったあ

やめちゃんが、母親に甘えられるわけがないでしょ」

倫子「それでもお母さんは、本当の娘のようにあやめちゃんを可愛がってる。これからも、そのつもりでしょ。ここまで育て上げてきたんだから」

春樹「そっか……」

と、鍵が開き、ドアの開閉音がすると、

夏希の声が聞こえる。

夏希の声「ただいま」

嫌な顔になる春樹。

夏希、入る。

夏希「良い匂いがすると思ったら、やっぱりご飯だったんだ。私も食べようかな」

春樹「何しに帰ってきたの？　っていうか、普段どこにいるの？　たまに帰ってきたかと思ったら、いきなりご飯食べようなんて、どういう神経してるの？」

夏希「友達の家にいるの。ここだと、居心地が悪いから」

春樹「あっそう」
夏希「……」
倫子「すぐ支度するね」
春樹「用意なんかしなくて良いよ」
倫子「（支度をしながら）……」
春樹「それで、今日は何しに帰ってきたの？」
夏希「何って、家賃届けに来たの。郵送だとお金かかるでしょ」
と、封筒を机上に置く。
無言で封筒を見つめる春樹。
夏希「食べることは、二人のバイト代で何とかなるかもしれないけど、このアパートの家賃は、私の給料で払ってるってこと忘れないでね。だから、こうしてわざわざ家賃届けにも来てるんだから」
面白くない顔で夏希を見る春樹。

36　宮田家・居間（夜）

夕飯を終えた真由子が、台所で食器を洗っている――考え事をしているよう

で、手が止まっている。
と、玄関でドアの開閉音が聞こえ、哲男が帰宅する。
哲男「ただいま」
ハッと我に返る真由子。
真由子「お帰り。ご飯は？」
哲男「外で食べてきた。悪いな、いつも一人で夕飯食わせるようなことしちゃって……」
真由子「（笑って）何言ってるの、私は一人じゃないんだよ。真実っていう娘がいるの。寂しいなんて思ったことないんだから」
哲男、真実の寝顔を見つめる。
哲男「こうやって見ると、本当に昔の真由子にそっくりだな」
真由子「私、こんなに可愛かったの？」
哲男「そりゃあ、可愛かったさ。何度癒されたか」
真由子「そうだったんだ」
哲男「今思えば、真由子がこんな人生になっ

てしまったのは、お父さんのせいかもしれないな」

真由子「……」

哲男「離婚届を置いたまま、お父さんや真由子を捨てて海外に行ったのには、母さんなりの覚悟があったんだと思う。これ以上、この家にはいられないと思ったんだろ。まあ、無理もないよな。お父さんは忙しいし、母さんが一人家にこもって真由子の面倒を見なきゃいけなかったんだから。自由になりたくて、家を出る決意をしたんだよ、母さんは」

真由子「……やめてよ、そんな話。私、お父さんが悪いだなんて思ってない。子どもを産んだ以上、子育てをしっかりするのは母親の責任でしょ。子どもを捨てて、家を飛び出して良いわけないじゃない」

哲男「そうだな……」

真由子「子育ての大変さは、私だって痛感してる。でも、母さんみたいに子どもを捨て

るなんて考えられない。私が、このお腹を痛めて産んだんだもん。一生、責任を持って育てなきゃ」

哲男「そうか……。何だか、安心したよ」

真由子「え……？」

哲男「母さんが出て行ったのには、お父さんに原因があると自分で思っていてね。真由子からすれば、父子家庭になったのは全部お父さんのせいだと思ってるんじゃないかって……」

真由子「(苦笑して)そんなこと思ってたの」

哲男「真実を妊娠したときも、お父さんのせいだって思った。いくら好きな人とはいえ、奥さんのいる男の人だ。そんな人の道に外れたことをするなんてと思ったけど、お父さんには真由子を責める資格なんてないから」

真由子「父さん……」

哲男「あ、そうだ。近いうちに、浩輔君に会うことがあったら、これを渡してほしいん

だよ」

と、鞄を開けると、いくつかの病院の資料を取りだして、真由子に渡す。

哲男「浩輔君にお願いされてたんだよ。じゃ、頼んだぞ。風呂入ってくるから」

と、出ていく。

怪訝な顔で、資料を見つめる真由子。

37　同・全景（数日後）

38　同・居間

泣いている真実に、おむつ替えをしている真由子。

と、インターホンが鳴る。

真由子「（玄関に向かって）浩輔、ちょっと待っててね」

と、すぐに真実の汚れたおむつを処分し、真実に衣服を着せると、玄関に走っていく。

39　同・玄関

真由子が来ると、ドアを開ける。

純平が立っている。

真由子「話すことはないって言ったでしょ。これ以上来たら、警察呼ぶよ」

純平「初めからそんなに拒むことないだろ。別れたのには、お互いに原因があるんだから」

真由子「よく言うわよ。妊娠が分かった途端に、私を捨てたくせに。私にも原因があるなんて言い方、してもらいたくない」

純平「……」

真由子「人の目だってあるの。私たちがこうやって会ってたら、いつ誰に見られてるか分からないんだよ。とにかく、真実は私一人で育てるって決めたの。あんたに助けてもらおうだなんて思ってない。とっとと帰ってよッ」

と、バイクがやって来る――浩輔が来たのである。

バイクを降りてやって来る浩輔――一瞬、いぶかしそうに純平を見る。
純平、浩輔に気が付くと、真由子に、
純平「また来るから」
と、小走りで去っていく。
浩輔「（真由子に）あの人は……」
真由子「別れた彼氏」
浩輔「えッ……。じゃあ、真実ちゃんの」
真由子「そう……」
浩輔「何しに来たんだよ？」
真由子「知らないよ。私を捨てたくせに、私に会いに来るなんて、どうかしてるわ」
浩輔「大変だな、真由子も……」
真由子「まあね……」
浩輔「それより、渡したいものって何？」

40　同・居間

真実を抱えた真由子、いくつかの病院の資料を浩輔に渡す。
真由子「これ。この間、お父さんが持って帰

ってきて、時間のあるときに浩輔に渡して
ほしいって」
浩輔「ああ、そうだったんだ。おじさんに、
お礼言っといて」
真由子「ねえ、この資料は何？」
浩輔「ああ……これ？」
真由子「チラッとしか見てないけど、どれも
これも、アルコール依存症の治療ができる
病院の資料みたいだね」
浩輔「うん……母親が、アルコール依存症」
真由子「嘘……おばさんが……？　一体どう
して？」
浩輔「俺が中三の時、進路を就職にして、定
時制の高校に行くって言い出した頃から、
そうなったんだよ。俺のところ、兄貴は立
派に有名な大学出て、今では大手の旅行代
理店の営業マンだろ。俺にも、そういう道
に進んでほしいって思ってたみたいだけ
ど、それが思いっきり外れて、定時制の高
校に行くって言い出したら、もうそれっき

りおかしくなっちゃって」
真由子「そうだったんだ……」
浩輔「酒に溺れて、二言目には俺は失敗作だの、産まなきゃよかっただのって言い出してるんだよ」
真由子「ひどい……。浩輔は、そんなこと言われて平気なの？　実の母親に」
浩輔「平気も何も、実の母親に言われたんだ。気にしないほうがどうかしてるよ」
真由子「働きながら定時制高校に行くなんて、そう簡単にはできることじゃないんだよ。それなのに、そんなひどいこと言うなんて、おばさんどうかしてるよ」
浩輔「確かに暴言ばっかり吐いてる。でも、そうなった原因が俺になると思うとさ、何もしないわけにはいかないなと思って……」
真由子「浩輔一人がそんな責任負わなくても良いのに……」
浩輔「俺の気が済まないんだよ。今日にでも、

この資料見せて、治療の話、するつもりだよ」

真由子「そう……」

浩輔「真由子も、別れた彼氏とのこと、辛いかもしれないけど、俺だったらいつでも力になるから」

難しい顔をしながら、頷く真由子。

41　牧家・居間

淑子が掃除をしている――和哉が帰宅する。淑子、和哉に気付くと、

淑子「なんだ、帰ってたの」

和哉「それはこっちのセリフだよ。夏休みとはいえ、普段平日家にいない人がいて、掃除なんてしてたらびっくりするだろ」

淑子「母さんだって、好きで帰ってきたわけじゃないのよ」

和哉「じゃあ、どうして」

淑子「……和哉、何も知らないの？」

和哉「何が？」

淑子「お父さんから、何も聞いてない？」
和哉「何も」
淑子「……」
和哉「母さん？」
淑子「（言いづらそうに）実はね……お父さんの会社、危ないらしいの」
和哉「……嘘だろ」
淑子「まだ、どうなるか分からないけど、一人で考えたいから、先に帰ってろって……」
和哉「……」
淑子「経営が思わしくないのは確かよ」
和哉「これから、どうなるんだ？」
淑子「海外の事業展開もうまくいってないみたいで、三代続いた〝牧不動産〟も、終止符を打つときが来たのかもしれないわね」
和哉「けど、まだ会社が無くなるって決まったわけじゃないんだろ」
淑子「何とか支えようとお父さんだって、ほとんど会社に泊まりきりで仕事してるからね。ご先祖様にも申し訳が立たないんだ

から」

和哉「そりゃあ、確かにそうかもしれないけど、大丈夫なのか？」

淑子「和哉は勉強のことだけ考えてなさい。あの会社は、お父さんと母さんで守るから」

不安な顔になっている和哉。

42　マンション・川村家・ダイニング

病院の資料を見ている靖司と謙輔――

傍に控えている浩輔。

靖司「ここまで調べるなんて、本気で母さんを入院させるつもりだったんだな」

浩輔「当たり前だろ。これ以上、母さんをほっといたら、どんなことになるか。専門の病院に入院して、ちゃんと治療したほうが良いと思うんだよ」

難しい顔をしている靖司と謙輔。

浩輔「元はといえば、母さんがあんな風になったのは俺のせいなんだ。でも俺は、自分の道に後悔してないから、今の暮らしを変

えるつもりはない。だからこそ、せめて前までの母さんに戻ってほしいから言ってるんだよ」

と、ドアが開き、廊下から愛子がフラフラしながら入ってくる。

愛子「そんなに母さんのことを心配してるんだったら、自分がちゃんとした進路に行けば済むことでしょ。今の暮らしを変えたくないなんて言ってる段階で、自分の思うようにしたいだけでしょ」

靖司「（冷静に）浩輔は、お前のことを思って、病院のこともわざわざ友達の親に協力してもらって、探してくれてたんだぞ。そんな言い方ないだろ」

浩輔「良いんだよ、父さん。結局、今の俺には母さんに何を言っても無駄なんだよ」

愛子、不貞寝するように、ソファーにうつぶせになる。

諦めるように見つめる浩輔。

謙輔「なあ、浩輔」

浩輔「何？」
謙輔「お前、本気なんだな？」
浩輔「ああ……」
謙輔「浩輔が本気でその気になってるんだったら、俺だって何かするつもりではいるけど」
浩輔「兄貴……？」
謙輔「俺だって、このままおふくろをほっといたらどうなるか心配だった。でも、仕事があって、結局おふくろの心配はしてやれても、どうしてやれば良いのか分からなかった。俺も、この際入院させてやったほうが、二人のためになると思う」
靖司「謙輔、お前……」
謙輔「親父だって、いつまでもおふくろを病院に押し込めることなんてできないって、言ってる場合じゃないんだぞ。いい加減に覚悟を決めないと」
　返す言葉もなく黙ってしまう靖司。
浩輔「兄貴……」

謙輔「浩輔、何もお前が全部の責任を負うこ
とはないんだ。俺たちにだって責任はある。
それは忘れるな」
浩輔「……」
一同、愛子を見つめる――寝ているよ
うで、動かない愛子である。

43　アパート・谷島家・居間（朝）
倫子が洗濯物を干している。
まだ眠っている春樹と夏希。
と、目を覚ます夏希。
倫子、気づくと、
倫子「あ、起きた？　丁度今から朝ごはんな
んだけど、夏希ちゃん食べる？」
夏希「いい。すぐに出かけるから。今日ね、
お店の友達と遊ぶ約束してるから」
倫子「（少し残念そうに）そう……」
夏希「（春樹のほうを見ながら）春樹には何
も言わずに出てくけど、また来月、家賃持
ってくるからね」

倫子「うん……」
夏希「じゃあ、私、歯磨いて顔洗ったら、すぐに出てくから」
倫子「分かった」

倫子、洗濯物を干しながら、春樹の寝顔を寂しそうな顔で伺っている――熟睡している春樹である。

44　宮田家・真由子の部屋

真由子が携帯電話で話している。

真由子「そう。お母さん、入院させることにしたんだ。よく説得できたね。まあ、この入院で少しはお母さんが変わってくれれば良いけど。浩輔は何も悪くないんだから、自分を責めちゃだめだよ。え、私？　まあ、何とかやってる。うん……純平のこともだけど、何とか乗り切るしかないよね、私たち。うん、じゃあ仕事頑張ってね」

と、電話を切る。

45　マンション・駐車場

携帯電話を鞄にしまう浩輔――ヘルメットをかぶり、バイクに乗ると、出ていく。

46　アパート・谷島家・居間（夜）

夕飯を食べ終えた春樹と倫子が、食器を洗ったりしている。

倫子「明日、出校日だっけ？」

春樹「そうだよ」

倫子「（不安そうに）大丈夫？」

春樹「何が？」

倫子「利枝子のこと……」

春樹「ああ、そのことか……」

倫子「お互いやりづらいよね……」

春樹「俺、一晩考えたんだよ、利枝子の気持ちってやつを……」

倫子「利枝子の気持ち？」

春樹「うん……。俺は、あやめちゃんの肩持ってたけど、友達として利枝子の気持ちを

考えてなかった……」

倫子「……」

春樹「けど利枝子は、俺の事を嫌ってるだろうな……」

倫子「春樹……」

難しい顔でご飯を食べている春樹。

47　宮田家・居間

真実を寝かしつけている真由子――難しい顔をしている。

48　ホテル（回想）

真由子と純平が、ベッドで寝ている。

真由子「ねえ」

純平「何だ？」

真由子「（嬉しそうに）私……できたの。純平の子ども」

純平「（驚いて）……」

真由子「私、産むからね」

純平「本当に産むのか？」

真由子「当たり前でしょ、純平と私の子ども
なんだから……」
純平「……」
真由子「……純平？」
純平「……ごめん」
真由子「え……？」
純平「真由子。別れよう、俺たち」
返す言葉もなく唖然としている真由子。

49　宮田家・居間（回想戻り）
涙を流している真由子――優しく真実
の頬を撫でる。

50　アパート・全景（翌朝）

51　同・谷島家・玄関
荷物を持った春樹が出てくると、靴を
履く――見送りに来ている倫子。
春樹「じゃあ、行ってくる」
倫子「うん、行ってらっしゃい」

春樹「（難しい顔で）……」

倫子「大丈夫？」

春樹「自信ないな、利枝子と顔を合わせる……」

倫子「……」

春樹「俺、これからどんな気持ちで、利枝子と一緒に高校生活送ったら良いんだろうね……」

返す言葉もなく黙ってしまう倫子。

52　中央高校・全景（朝）

53　同・廊下

春樹が登校してくると、立ち止まる――ためらっている様子である。

大きく深呼吸をして、教室に入る春樹。

つづく